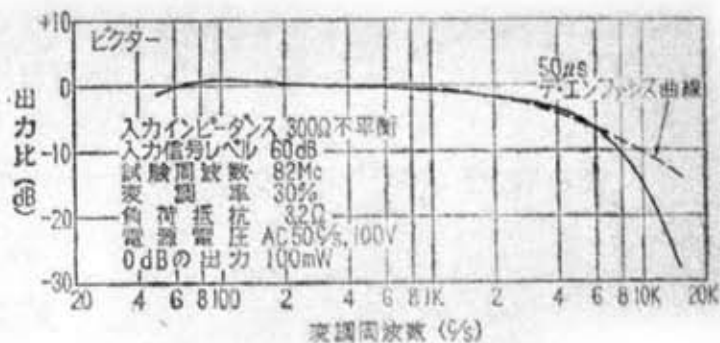


〔第3図〕 ひずみ特性 (入力を変えたときのひずみ)



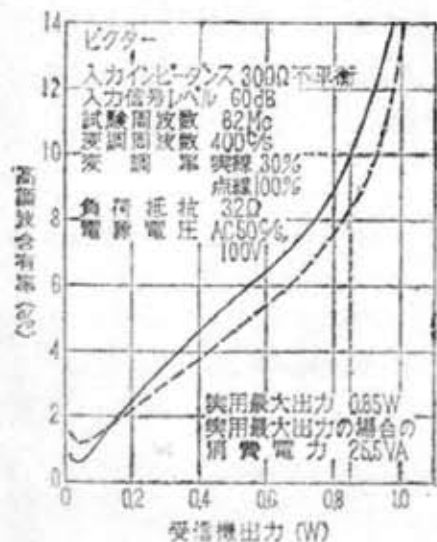
〔第5図〕 電気的忠実度特性

されているため、 C_{pk} による帰還が生じないため、安定は増幅ができ、しかも局部発振の勢力がアンテナ側によく射することが少ない。

周波数変換は 17EW8 の他の三極部で発振と混合を行なっている自動振形で、発振回路はプレート同調形で安定な発振ができる。また、この回路はブリッジ回路を構成していて局部発振の勢力が入力側にもれないようになっている。局部発振の同調バリコンに負の温度係数のコンデンサ 5pF が接続されていて、発振周波数の安定を計っている。そのためこの受信機には AFC 回路はついていない。

中間周波増幅回路は、12BA6 による二段増幅で、一段目の 12BA6 は AM の中間周波増幅器にもなっている。二段目はグリッドリミッタの役も受け持っている。

FM 検波はゲルマニウムダイオードを二個使った比検波回路である。



〔第4図〕 ひずみ特性 (出力を変えたときのひずみ)

低周波回路は 12AV6 の三極部で増幅をして後、終段管 30A5 に加えスピーカを動作させている。このセットは音質調節器は付加されていない。

電源はトランスレス式で、B電源はセレン整流器を用いて交流の 100V を半波整流して得ている。

4. 性能

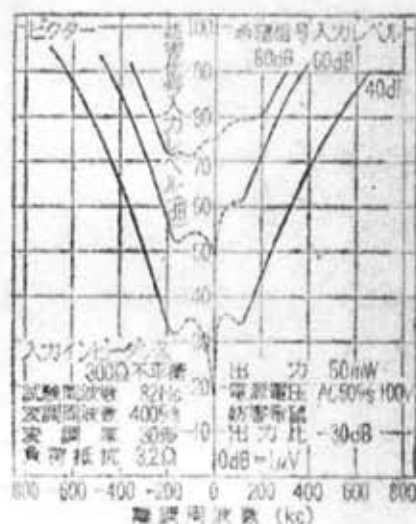
FM 部の最大感度 (第 2 図) は受信バンド内で、ほとんど 28 dB フラットである。また最大感度における S/N は 37.5 dB と、やはりほとんどフラットで良好である。

しかし AM 部の感度特性は紙面には省略したがあまり良くなく、AM と FM 部のバランスがとれていないように思われた。

AM の調整ももう少し完全にすればバランスのとれた性能になるであろう。

入力を変えたときのひずみ (第 3 図) は、82 Mc において 30% 変調 (25kc 偏移) でも、100% 変調 (75 kc 偏移) でも図のように良好である。

出力を変えたときのひずみ (第 4 図) は、82 Mc において 30% 変調のとき



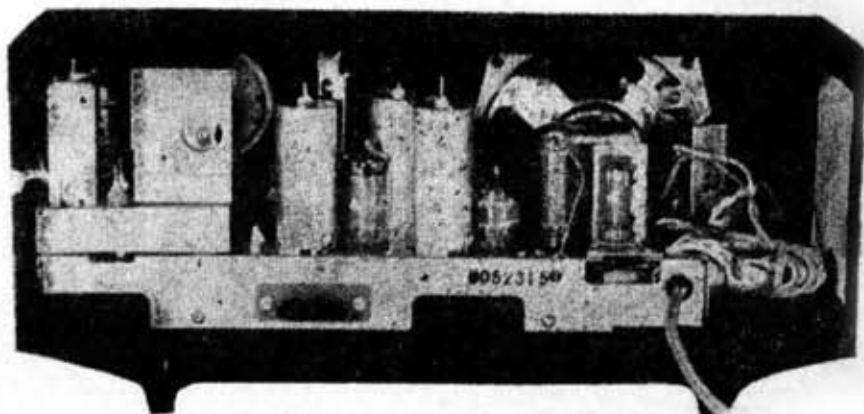
〔第6図〕 実効選択度特性

は、無ひずみ (10%) 出力が 0.85 W 100%。変調のときは 0.92 W である。

電気的忠実度 (第 5 図) は、82 Mc で試験したが図のようにおおむね良好である。

実効選択度 (第 6 図) は 82 Mc の場合、図のような特性で、まあ良好といった特性である。

実際に FM 放送を聴取した結果では、この程度の価格の受信機のうちでは良好な性能であると思われた。



セット裏面